

## 老齢動物の病気について

読者の中には、「僧帽弁閉鎖不全症 (MR)」と診断された、あるいは以前飼っていた犬がその病気だったという飼い主さんが少なからずいらっしゃると思います。MR は決して珍しい病気ではありません。今回は MR の概要について説明しましたが、今号から「MR の疑いがあると診断された時に、飼主として何を考え何をすれば良いのか？」をお話したいと思います。

## 1. まだ気になる症状が出ていない場合

健康診断や皮膚病やその他の治療の時に「心雑音」を指摘されたり、心臓病の疑いがあるとされる場合です。

## ①心臓病の初期症状が本当にないか？

教科書的な症状としては、「疲れやすくなった」「咳をすることが増えた」「食欲が落ちた」などです。具体的には、「散歩していると後半とぼとぼ歩くように

なった」「ボール遊びや走ることが長続きしなくなった」「好きなものなら食べるけど最近食が細くなったように感じる」あたりでしょうか？

犬は体温を不感蒸泄（ハアハア口を開けて呼吸することにより気化熱で体温を下げる）で調整しますが、身体の酸素要求量が増した時も、人と同じく開口呼吸することで呼気吸気の量を増し、より酸素を多く取り込みます。心臓病の身体は肺での酸素交換の効率が落ちるので運動時や興奮時に、より積極的に呼吸する必要性が生じます。散歩中や散歩から帰ってきた時、口を開けて「ハアハア」している時間がいつもより長くなった、と感じたらそれは心臓病の初期症状かもしれません。

## ②見て分かる症状よりも大切なこと

犬の1分間の安静時心拍数は成犬で60～80回、大型犬で40～50回が正常とされています。心臓病

## ② 犬の僧帽弁閉鎖不全症

## 2. MR の疑いがあると診断された時に、飼主として何を考え、何をすれば良いのか？



文・写真 中西章男  
text & photo by Akio Nakanishi



になると心臓が1回に身体に送ることができる血液の量が減るので、身体は回数で補おうとするため心拍数が上がります。心拍数は興奮でも上がるので、なるべく落ち着いて寝ている時や飼い主さんと安心してくつろいでいる時の心拍数を数えてみてください。安静時心拍数は個体差があるので健康なときのその子の心拍数を把握しておくことが大切です。また、犬の1分間の安静時呼吸数は小型犬で20回、大型犬で15回程度です。心臓病になると身体を巡る血液が減るのでより酸素の多い血液が必要とされ、呼吸数も上がる

傾向にあります。

安静時の1分間の心拍数が80回を超える場合、呼吸数が40回を超える場合、異常かもしれないと判断されます。

安静時の心拍数や呼吸数は心臓病の進行の程度や病状悪化の予知としても重要です。まずは、「飼い主さんが自分でできる判断項目」として、「健康な時から習慣的に測定」してみてください。

次号では測り方のコツを説明します。



## Profile

獣医師・獣医学博士。1959年生。1986年日本獣医畜産大学（現日本獣医生命科学大学）大学院博士課程卒。大学ではフィラリア症の血行動態、腫瘍および外科の免疫について研究。1987年東京都杉並区で「阿佐谷ペットクリニック」を開院。小動物の総合診療医として犬猫のみならずウサギ、小鳥、ハムスター、モルモットなど数々の動物を診療してきた。趣味：ゴルフ、モータースポーツ、機械いじり、動物たちとの戯れ。著書：『車イスに乗ったチロ』集英社